

地

二四九
六



木骨名所圖考

五

915.5

327

Vol-6

水曹路名所圖會卷之五

目錄

○江府日本橋

○行徳

○八幡

○八幡宮

○釜ヶ谷

○釜ヶ原

○野飼駒

○白井

○大森

○本嵐

○新松場

○坂東玄郎

○神壽

○香取

○香取神社

○息栖社

○鹿島

○鹿島神社

○要石

○高天原

○常陸帶神

○鹿島七不思議

○鹿島年中行事

○常陸帶神

○所經塚

○廣圓寺

○鹿嶋古城

○板久

○鹿生

○王道





行徳河岸

江戸

水曾路名所圖會卷之五目錄

- 小川
- 府中
- 小畑
- 十三塚
- 同壁川
- 小栗
- 真岡
- 小守登
- 宇都宮
- 宇都宮社
- 推名
- 同壁
- 左田
- 本等
- 芝
- 五料
- 室八島
- 徳社
- 合我湯
- 椽本
- 富田
- 天明
- 天明釜
- 梁田
- 二子山
- 安藤川

釜ヶ原

つりろ

る士の夕日れ

くふとて

釜ヶ原此乃

駒のくんく

新志



本巻五ノ一

は世古伊りて

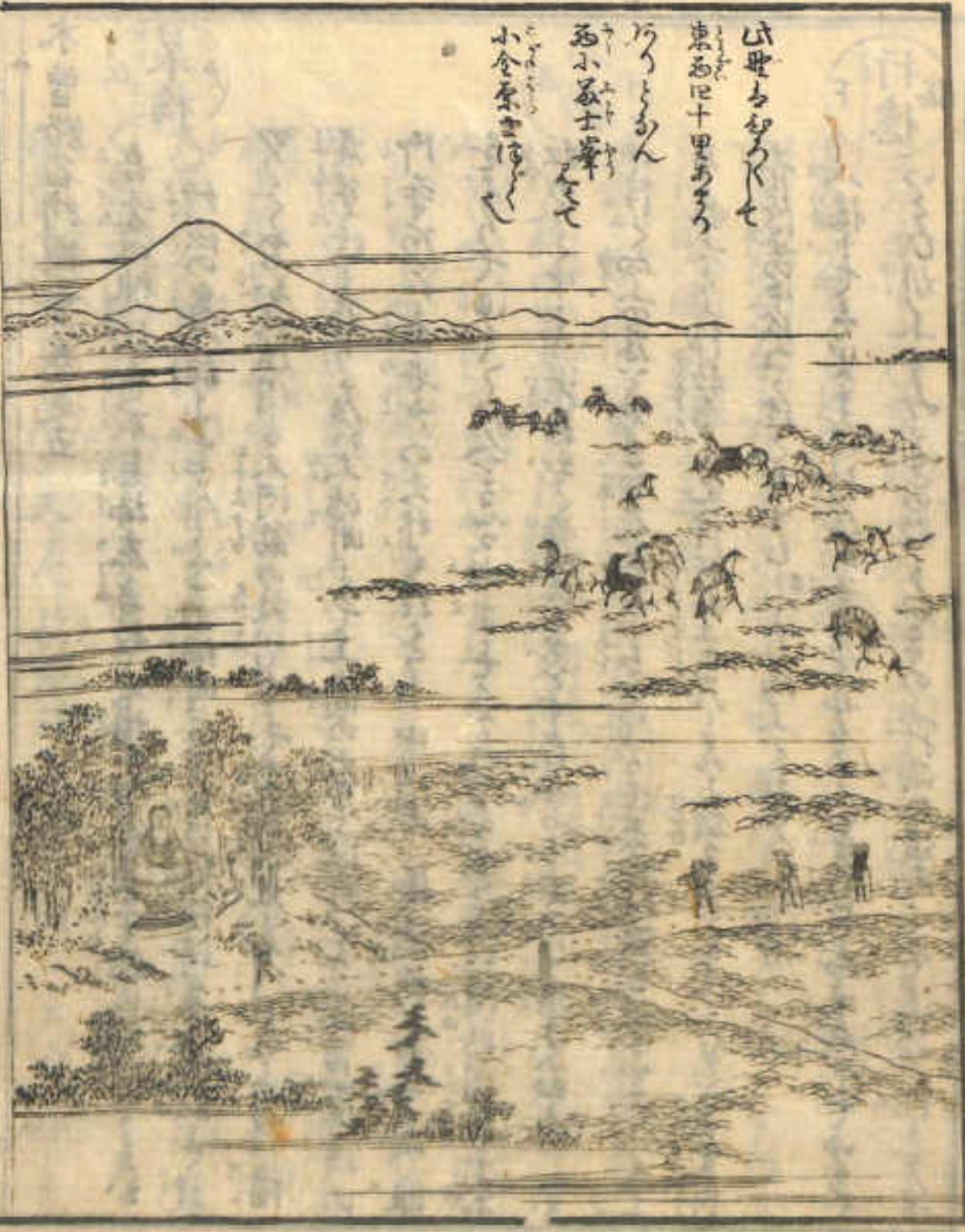
東西に十里あり

ろくとあん

西小坂士輩

んきて

小倉原きほく



木曾路名詞圖會卷之五

日本橋

吾妻の神社青取息撫麻多岐人指せんて日本橋の跡と云ふ
 て行徳の宿人紀よまふ人々多小細町三丁目の行徳河峯より紀よ
 町よりまふには川と大河筋の枝川ありて名残小名本川より右に満
 彦等行りぬり左に大橋町とて工商の家々は町より五百羅漢の
 御寺ありて是安戸の末村も程とて中川の御国筋の寺屋敷
 をまわつてゆくと此へより水まき人なれどもさうに漕竹川筋の
 紀ありて中より老翁出く儀成賣薬とすむ忽ち一河の中流より
 せげく向ふの岸と見れば其の志やまもつて若のは葉と波よれども
 あり勢よくつむむおもふに只此の志はともよ戯るるもさう
 大橋は其の中流より往くをすむとよみぬ人もおのいゆは
 八橋までましましり以彼の草屋小舟とていふ是合の志とてゆくと
 いふひりふきまをさの形くひまのよれ雨の道ありて道筋は泥くんで

行徳

本居五、廿一

下幡

只沢半のひ草鞋土まへに柳上郎中おれおと六日おのほきと
 道のりありて依指人より野尻とてとて遠小都のひり
 鶴ま白をまふたさびさ夕日のひりあたる雲もあつとつら
 らんぬ八幡より下りて
 釜ヶ谷まで二里八町は里の中より信水が勢信して八幡宮まで
 多小筋の生々神といひ道と東海道中と云ふとらひは筋の
 へかく道巻して馬竹をまされさうそ達の林苑ある村色は
 いて所とて偶息亭ありて海とゆふ光る風とてやひらまは
 田原の志の女とまをさうとて早苗は信とあつてこの小川は河
 楊上風とてつむのみの毛もうちらさひと田原は形とて
 戸さうとて原宿のひりむをすさうとて雪小浦より非とつら
 くもを中流らむと柳とてさうの志まひり有林ありてあは
 是は人煙平くつむとて又さうの志まひり有林ありてあは

金ヶ谷
下 総

東の面の家のまふに小町村南村水のまふ小田原城なる
 白井まで約七十里ありて邑里はさうと田中成りた小見右小見左
 田園陸路たりありて耕し向ふ五苗をとりて芝草をとりて小舟舟入
 さぬ川くまのりありてちちらふが中か丸八田舎の煙火もきく子氏
 梅橋の器より用も水龍よりくろく楯敷と儀も夏の雨をとりて
 光とのねくより九種風をとりて三枝風すのひ敷と家店はさうありて
 梅園まで約七十里ありて小所小至舟の山野を渡るもて夏州
 ありて風気産すく小舟舟の船六十をとりて小舟舟ありて
 子城もさうして遊ぶさぬといふ一これ河邊の馬ぞと人あつて
 公官の侍馬もて馬寮の人あり小舟舟一駿馬は折と折とありて
 親馬助もは其まも小舟舟はさうといふと戯まると馬小舟舟も及に
 そが中成歩りのばまくの駒人を馬も早く服の方へ送られけり
 しろの馬の顔をとりて舟や水もさうといふとくろくありて小舟舟
 小舟舟

東の面の

白井
下 総

あまのふ見ちのほろろまきくつとつと又光のしりりてあつて
 ましやいともまきの空を應む科脚もまふ雨金小道げき日の入極ふ
 白井は白か
 白井は白か
 大森まで二里は所を民屋敷ありて馬のりより中をわけては野
 三つありてはよりその中はを青葉形竹屋ありて一葉法池ありて
 まく野原り林を通りて大森まで二里ありては野原りのほろり
 地金池地ありては家屋もあつて農の業もまきくして
 村のほろろあり

大森
下 総

本面まで大町又野を邑民家以通りてこの要所の原をとり
 て穂ふるを農家以まきくまふありて一本原より二所ありて

本原
下 総

本原まで約七十里ありて民屋敷ありて馬のりより中をわけては野
 地金池地ありては家屋もあつて農の業もまきくして
 村のほろろあり

本
丸

山
州

坂
本
孝
郎

記
五

香
取

魚
桶

廣
港
上

至
向



廣
港
上
四

まく候の彼と自くて五通小今一色ぞたぬと土佐日記のありけし
 仰しきしとくく麻痺息極香雨(落)と持しう流波ののり
 赴くより成之は和時ついで一其や和を志のり入りてくく
 をりて一食食とて先く橋元とて和を志少和のれと是れく一
 夏のやれ暑も何風事影、弘安波の巻清一左右の本然と其の成
 の下く風生志げふ真流の風もがびくともく夏成とてま
 程も和く大河もつとまをきくく飛工類ふ其は河さつりぬる名ありと問
 ありぬ匠煙管を巻く和くこれ利根川とてよみ源の蘇頼川あり
 流波川とて一底合すく坂東を和くともく坂東の北流まらぬを和
 と其首とてふおしし雨卷を和く小流く夕陽而小傾もは神の
 浪ふよ和るめいあぬおけとも黒白をりたて入白洲もたてふ
 公あれども真体地小神とて平の剛とてて流日沈とてり乾坤
 きて和く二葉のぬく飛人を神侍てり所ありて和

本考あり

神寄下

神寄上

神寄下 和者々れ六トてあ中一の販食人也一食をぬぬあり
 かりん起とく宮居小指と

祭神 惶根尊

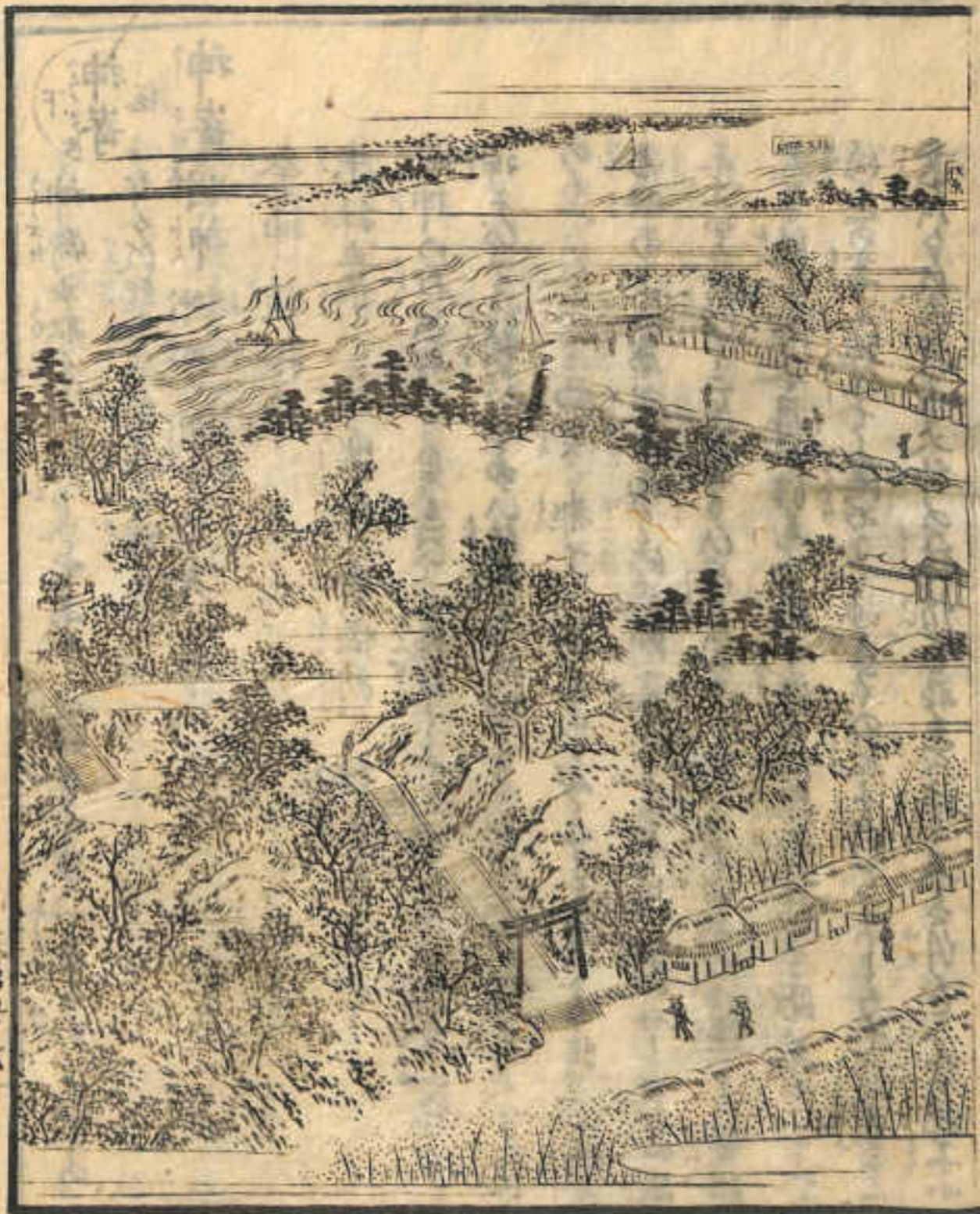
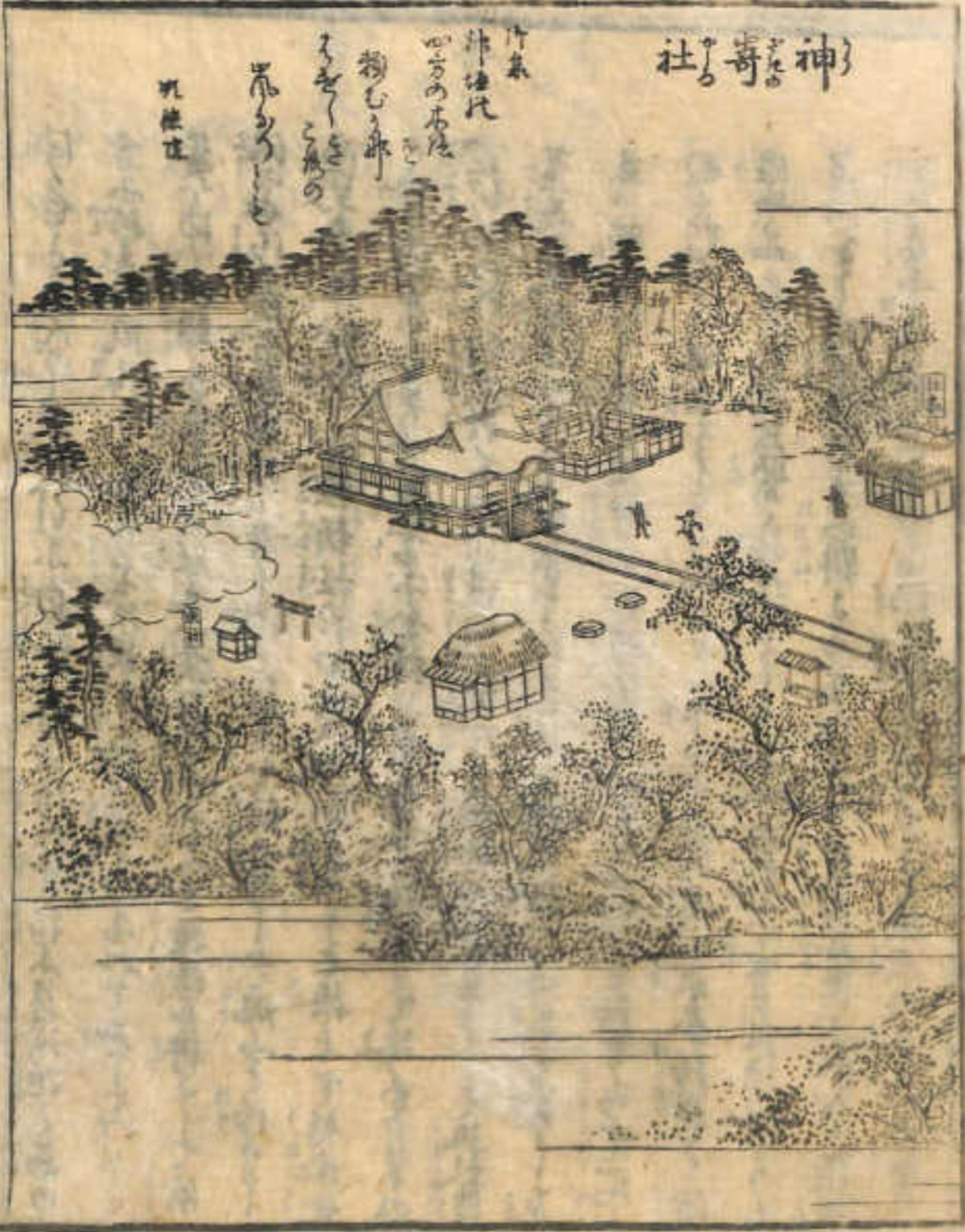
末社 五前 神樂殿 御供所 神木あり

此神の杜瓜和り見まはつと森然とて大樹ありと無産山の
 神さひする社頭たむあひ殊勝ありてのりくともくおまらば和り又和
 のわてり小川の橋度く都て七八町もあつぬ中より身とて助く小洲
 傳興ありて菴荒とて和り橋雁洲寄に下るも風素の夕下とて和
 三子里長は十二風の和りひ骨和を和りを吊るるのには候り
 天を浸し潮水月にはまて備千頃の被漆和の和りく彫花せりて
 流連の末と流とて和りありてゆとての和りてふよりて交易
 業和りま和り又神の杜(竹)を和りてはく入とりて和りて和り

神壽社

竹森
津地代
四方の石段
物心
えき
あまの
あまの

乳徳庄



本考其ノ六

舟をせしむるがは方り小自浪の目代流のち去れ小月以抱くあ
 方小舟まり風流してち去れ家とたる漁舟もれを身ふり
 養とゆい頭も大英を冠と一葉の行舟よちち種海舟舟しては
 流の水はは家懸流下る一滑り我豆を洗ふるして流る流る
 漁父あり半次下して裡柄柱のたぐひは約ふ三とちと換りて念を
 く芳意の中とちりす為書小合構と積り月も舟りて海ふりぬ
 一約の妹の外利名程く三天の迷回天地や揚柳の月高うして孤舟渡
 蒼蒼の風軟くわめて雪はらうは易林と裡流約く仲友を食し花
 惹ハ鱧を釣て曹公成登し波流遠く歩く巨鱧を釣てあそ用り
 那多所ある漁笛をふりし鷗とさび下りて波のたふ求ふ約罷く陰
 浪やちるる舟舟に聲く凄涼くして古今の愁風書とんはつらと
 月ふとせれなる程とと梅よとちひくりらる梅雪のふれはつ浪
 洲の春ふとく物目のちふ流の向うくして城取乃ち在る書同

本考五七

香取

香取の浦舟着は地下総の地積は下総舟属にち移り
 神社すて陸地十八町あり

香取浦

香取浦をり

香取太神宮

香取郡小湊町 延喜式名神大

祭神

経津主命

若宮

神社の

鹿島社

神社の

花齋神

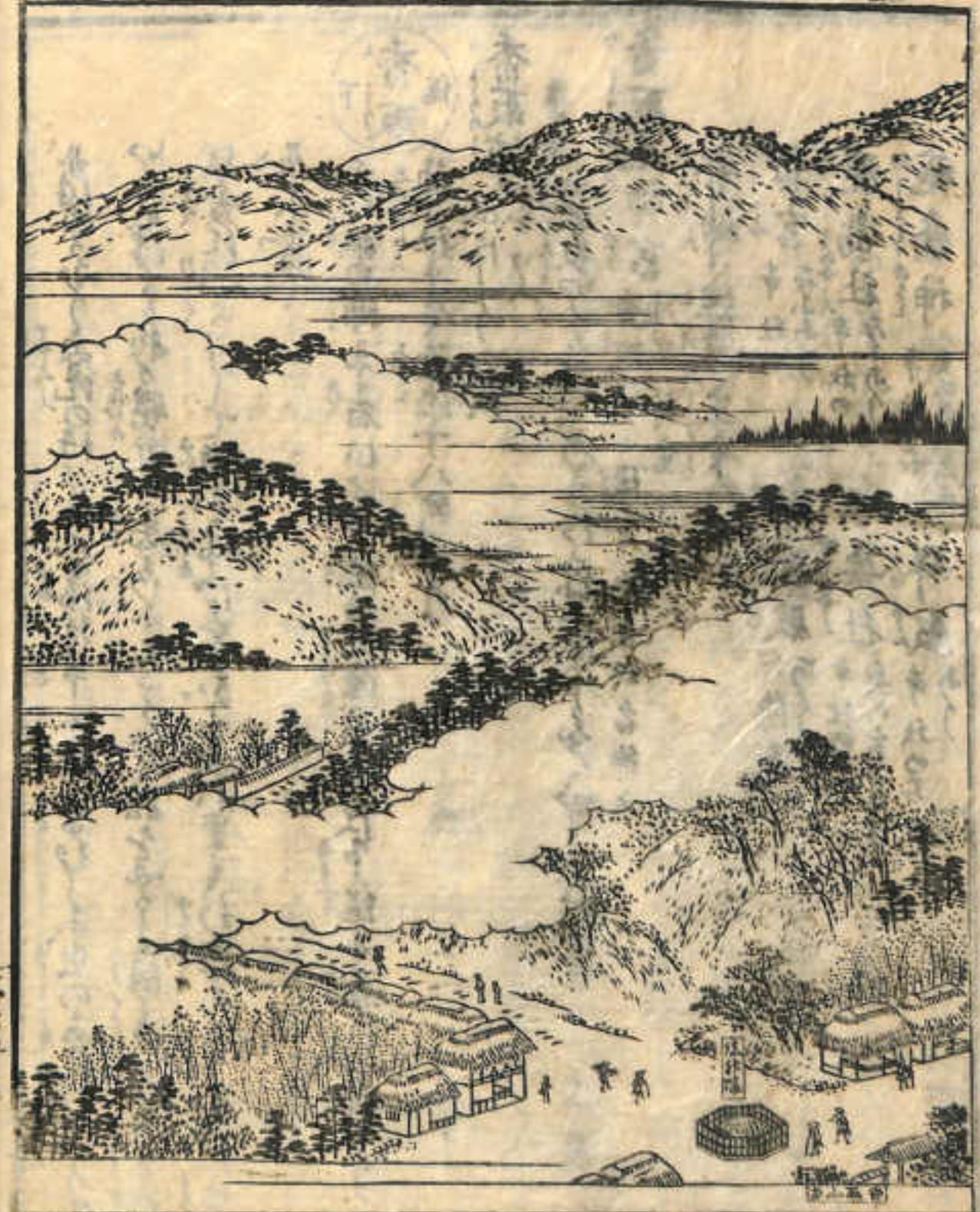
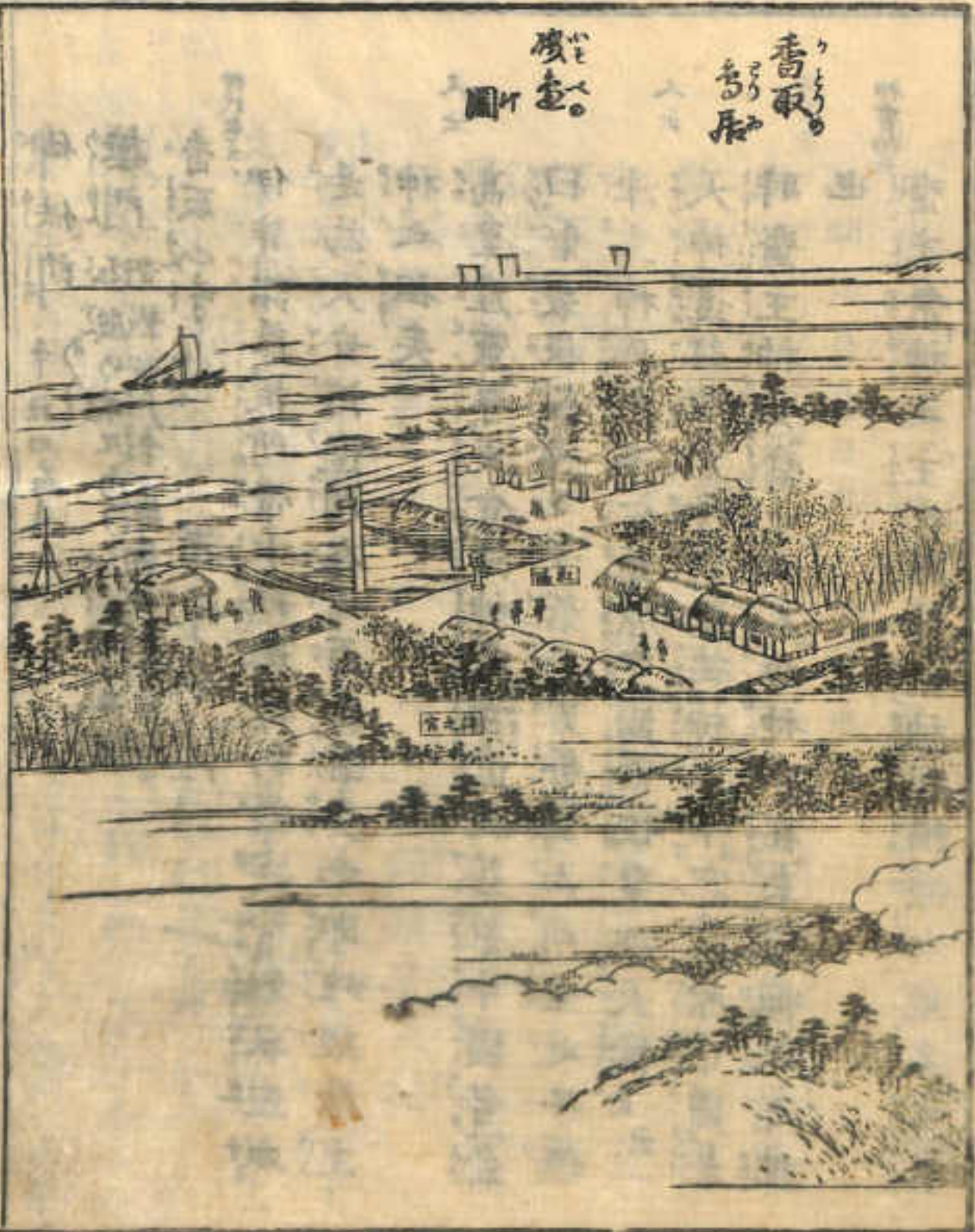
神社の右

拜殿

神社のあふ

直康

香取
高野
磯
磯



御供所 本社のあり

樓門 殿の末にあり

香取山寺 諸神 塚 日 上 小

伊弉諾尊 拔所帶十握劍 斬 軻 遇 突 智 劍 及 垂 血

是為天安河邊所在五百箇磐石也 即此經津主

神之祖矣

高皇產靈尊 更會諸神 選當遣於葦原中國者 命

曰 磐裂根裂神之子 磐筒男 磐筒女 所生之子 經

津主神 即令平定葦原中國 而後皇孫天降云

天神 遣經津主神 武甕槌神 使平定葦原中國 是

時齋主神 彌齋之大人 此神今在東國 檄取之地

也

齋主祭神之主也 經津主神 別稱 檄取地名 在東

神代卷云

又云

又云

神書抄云

本卷九

海道下総國 一作香取 今為郡名 故經津主 号香

取明神 是春日第二神殿也

經津主神者天之鎮神也 其先出自諾尊 初諾尊

斬遇突 血成赤霧 天下陰闇 直達天 漢化為三百

六十五度七百八十三 磐石 是謂星度之精也 氣

化為神 号曰磐裂 是謂歲星之精 裂生根去 是謂

熒惑之精 去生磐筒男 是謂太白之精 男生磐筒

女 是謂辰星之精 女生經津主 是謂鎮星之精

支那社の地より先の新あやの社傳云神代よりこの後ありて神武天皇

元年 造宮より 瓦をくく之を例案の四月八月十月小歳をくく夏

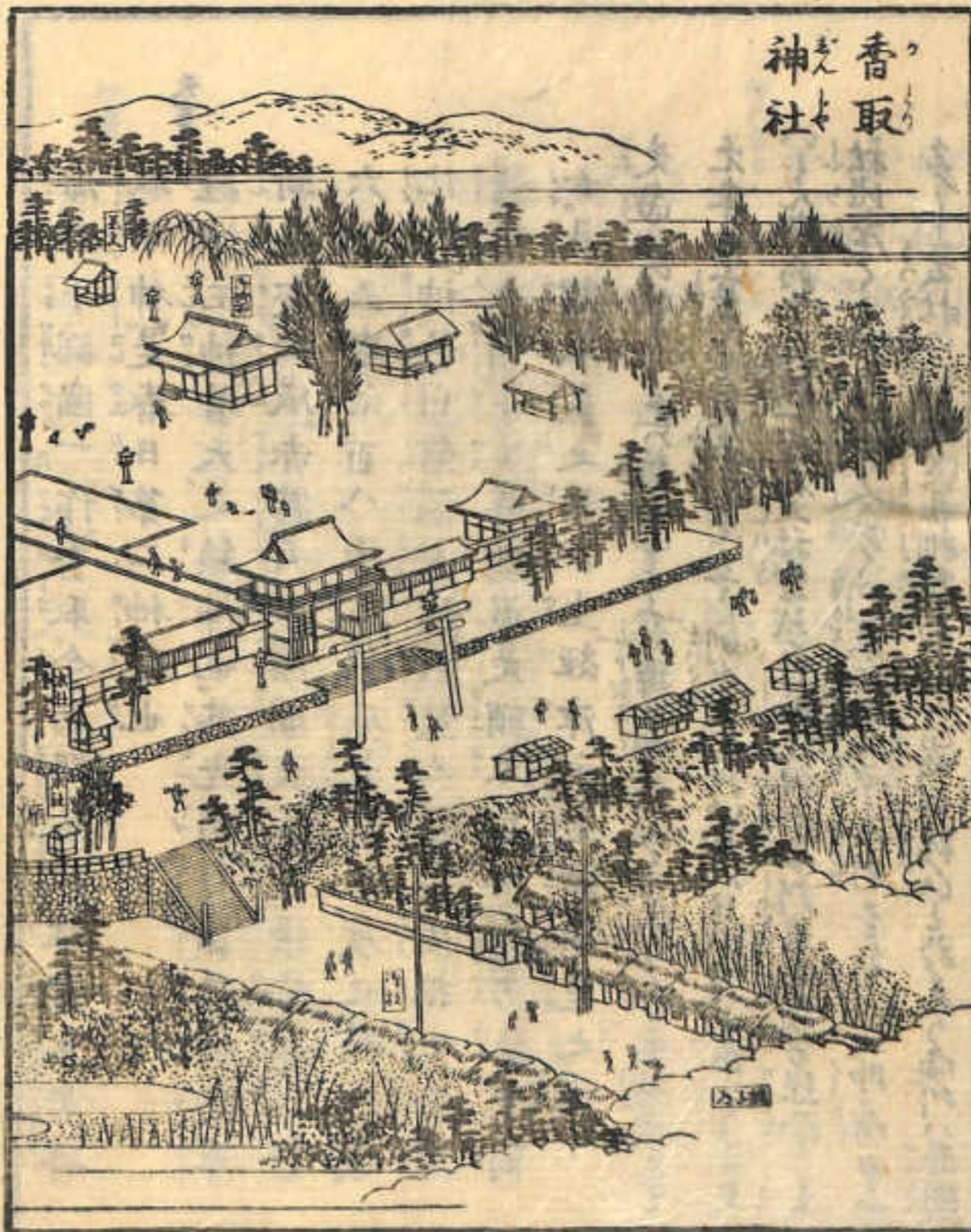
いんくく社に一千石大社宜以香取上総分少利友を借方孫心し云

社地廣くして小治人多く門前の善人桑店軒をわく又師房を

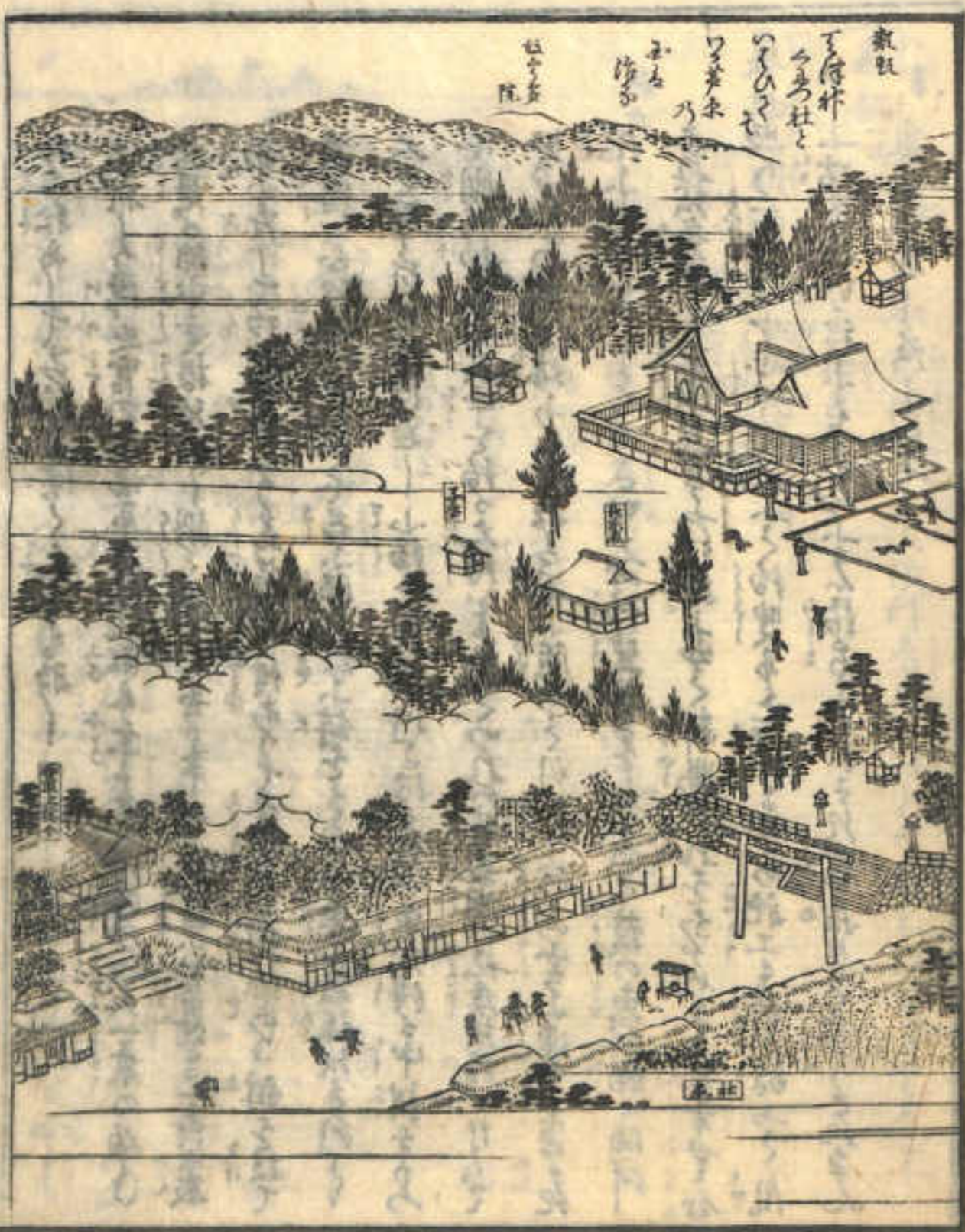
多し夏枯の頂より居相撰あつては所の橋のとりまら南河の南園

天書云

香取神社



新設
玉手林
今更社と
いふひそ
り茶末
乃
玉手
池
社



の本社ありて本社不修く文幕も形
 本社あり津之宮の起場も奉り又船小舟にて萬頃の口天一葉のゆき
 呂見の浦水雲根根候へ候て幸あつたに道小若草をそそぎに菖
 面小舟にて釣るる候あり若草高の價ありて又王を釣の洲あり餌を以て
 其得とむれ人祿を食ふて若小服もね小餅を以て釣と魚を取極成を以て
 人を取ふ人候獲候に小舟を以て川にははま小島成増の中餌を以
 て國成物もて其中と釣る大釣と名づく其其國の産成物なり也
 といひかぬ箱を以てして舟を風小随ふといひいふのあ雲も連たり也
 風小散く方のてくまていふ人の釣雙着を以ていふ獲の魚成増の浦に
 これ成多をそ一盞を以ていふは小舟と軒陽の軒を以ていふ萬事量心
 釣り一釣竿と賞と一湖と釣也れを酒を以ていふ籠工も共し砂を以て
 小舟は漕り候ふるもいふいふも所ふるもいふいふも見見くくくこれん
 息柁の舟一後とらふ

息柁

此地を以て常陸國と云ふ所の名指のほうりうとを取成下りし
 舟一後とらふ

息柁大明神

多々神氣吹戸主命

神註
 心あれんれ見果も心あれあり候とらふ候は忠告也

末社二所
 本社のほふ
 日一所
 本社のほふ

後田元社
 あり
 本殿
 あり
 奉也堂
 あり
 奉也堂
 あり

八丈龍王社
 あり

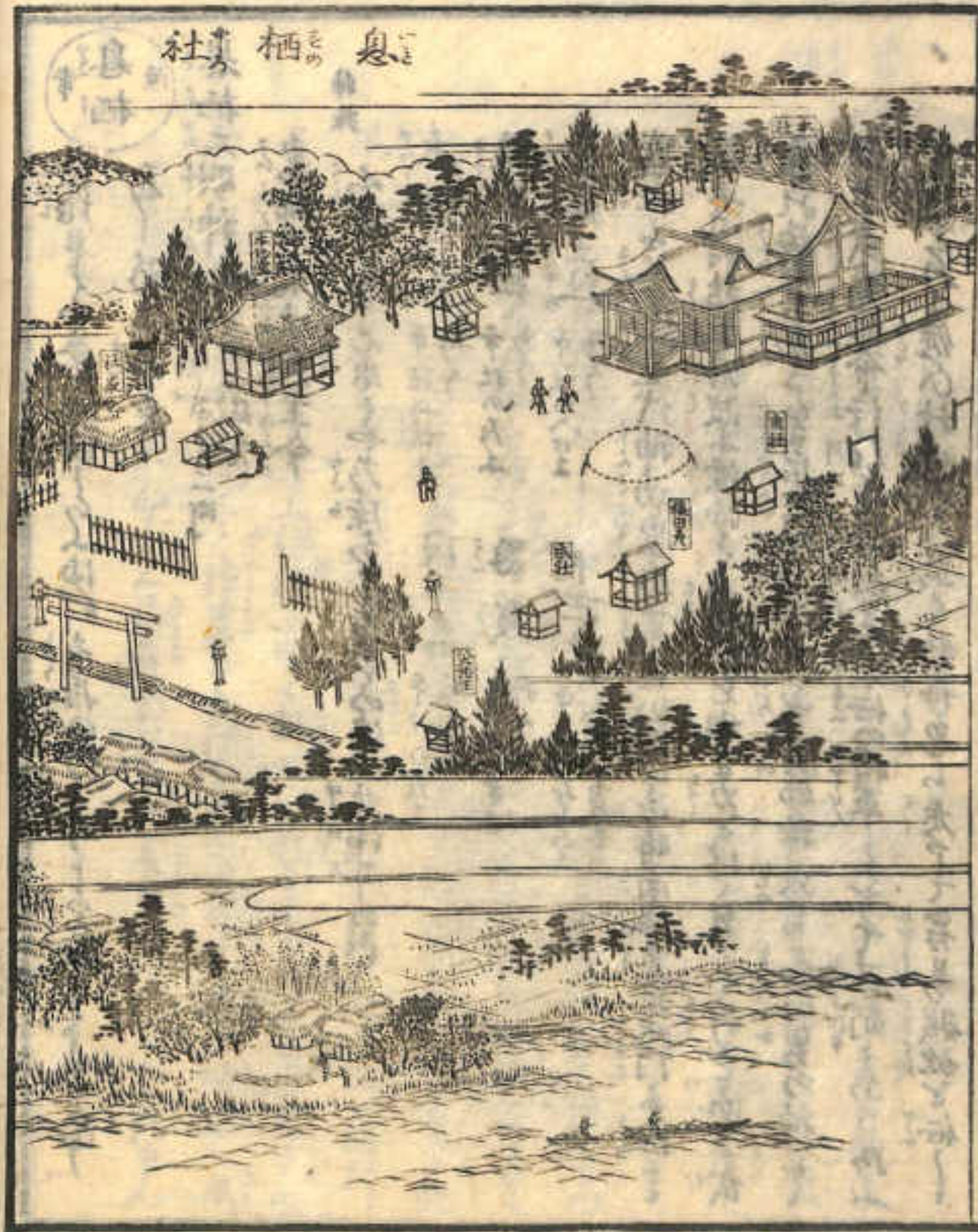
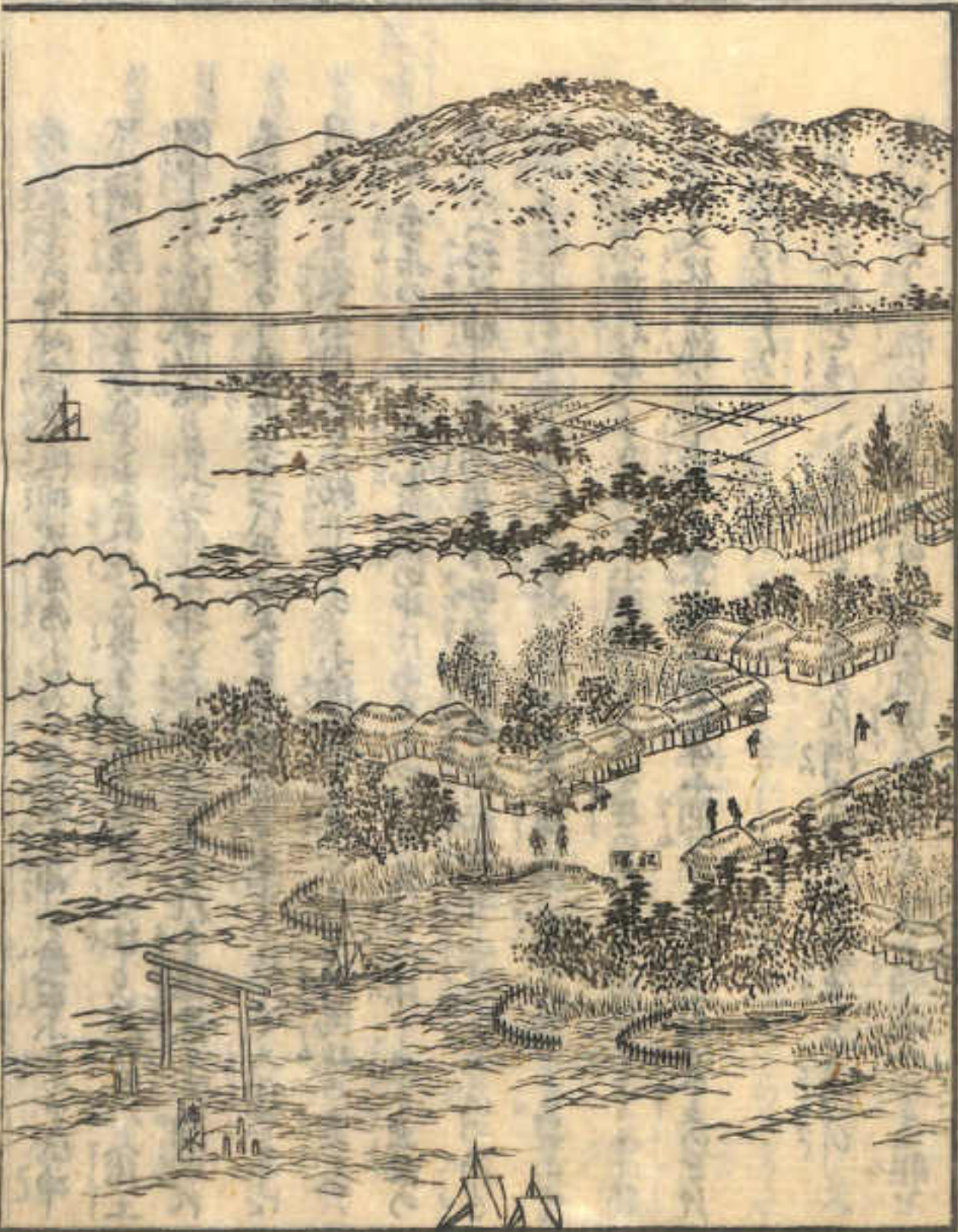
当社之人を千五代神功皇后京夷征伐の時將南海本比水口舟泊を

移し候時浦波小深泊り進得を以て力とほく勢もいふいふとて還し武

庫北海岸ありて皇居候とて移しりやまの御神多ち二箇男の神也

況し武甕槌命経津主命等と東征の將軍とありて其副とあり候

皇后とあり候神とあり候とて人かく勢舟忽ち走りて容易賊故と候



余りくりに日影生じて雲と流縹の色がかり樹々をくわくふれ画を
見れば驚く日影の流縹生じてひるまき一帯の空をくわくは流あり
老子曰は海の所はを往而谷のまより其能少の少なりとこれ能小思
見よと魚の上を工頭をこれ人住み此魚樂所論して又其能樂也
とんちん我國の少なりは極なり日影のまきをくわく小東若洲千列の死
小祖列東海の中にあつて地の度々五百里より不死草壇田の中はまん
やうに其草菰苗小樹より長三尺人己小死をるとんちん即これ能復は
獲かると能工よつてくわく移くえひれ能もなく麻縹のまき居のりく小思く
下流の本流の所の素湯より麻縹十七畝路十一里又ありより麻縹山と
十六里半船と麻縹の原を小看す外房城よりてあ中此農家に泊
りま出く有麻縹のりく飯と能くわくりくわくけりりわく何の能移りくわく
こま能後小本築より小能移りくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
出んよりこれりて舎り外房城入堂日室門の看能移りくわく移りくわく麻縹の

帝
鹿島

御座り海まで十餘町道小がれ墨山ありて社地の町三町げりあり
神祠小つる

鹿島太神宮 當國一之宮と稱を社於二千石

祭神 武甕槌命 延喜式名神大

奏者社 本社の外に 新嘗 御殿 本社の外に

神樂殿 本社の外に 水舎 日所小

龍神祠 二条樓門の内 御供所 本社の外

樓門 内小龍王 素盞鳥社 外門の外

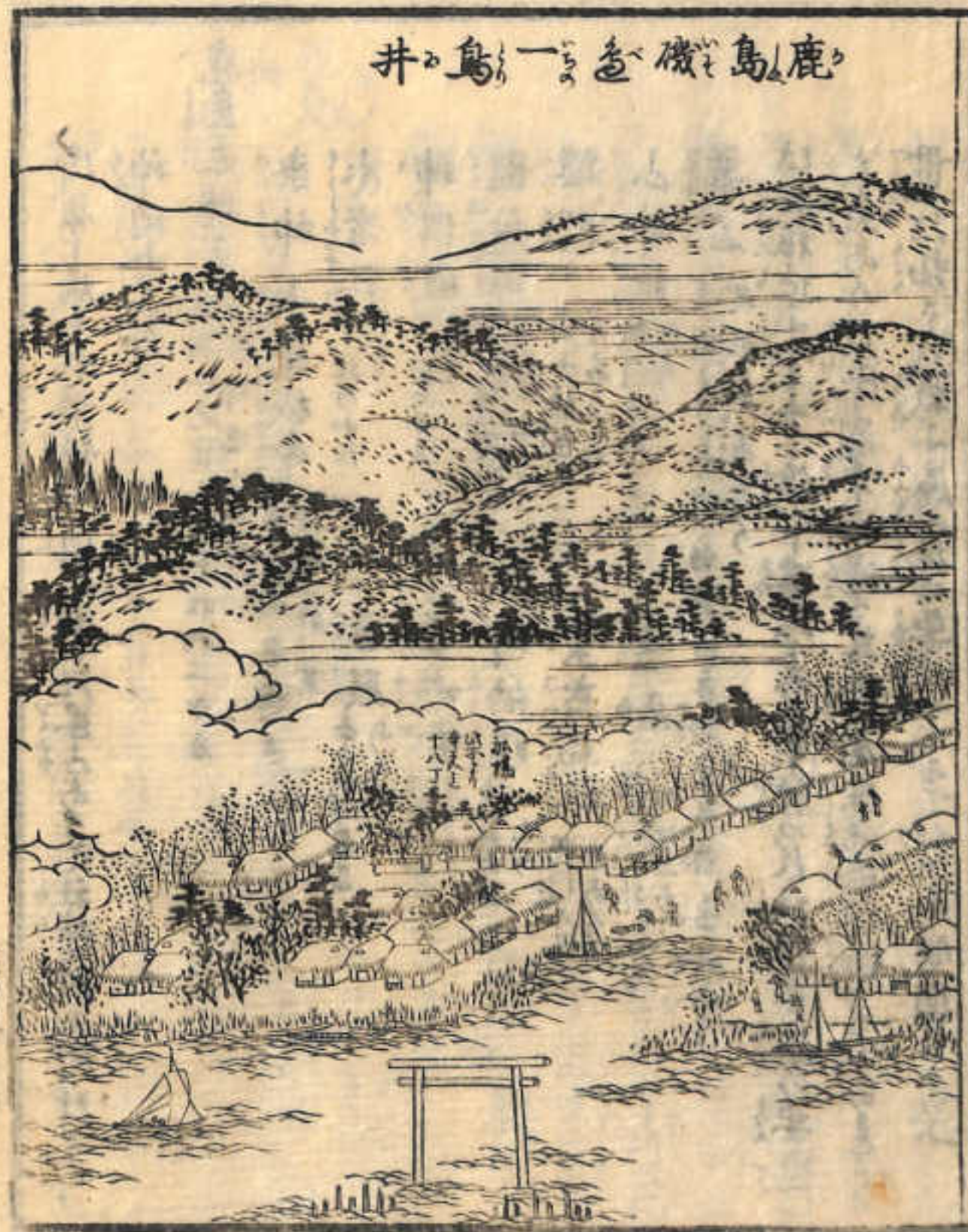
山神社 外門の外に 鳥居 外門の外

要石 本社より所餘異の方廻小宮籠も居あり

は石根地小入る幸徳一其大なる幸徳は社傳云廟の要の也
大魚あり日本國中小遊其首尾麻縹時神訂してまきを
貫た勃たは故小廟の福の要れわくめて訂して能固くわく



鹿島磯邊一鳥の井





鹿島神社

保方
 ちたす
 日方れ
 中修り
 あまの神
 君少ふ
 びを
 び色
 乃々
 先
 赤四二日
 甚

五ノ五ノ十六

高天原 當社の五十餘間

相傳小麻呂神乃小比賣小比賣者率之外國の鬼と相闘し
神利あり時を拜麻呂の進々々風雲のてりて幸に海濱小入ふ又此神
利ありさう時を拜麻呂の進々々却て越え直入ふ家入ふさう
土人時々其率成りてさう

御手洗井 幸社より御手洗井あり傍小倉井あり井の廣十間許
中本流泉源とて御物也

當社のみだしの井を賀茂のみだしのとて流人々入て其流
新系小倉流あり傍小倉流あり又大黒雲辨財天龍宮
殿庫裏池に落守あり又傍小倉碑あり

凍くさや神代のおくれあの色

鹿島七不思議 要石 淨手洗井 末の川 さ同原より

矣根石 同原より 結松 上と下 二度栗 無法地 七井 神代内

伊弉諾尊斬軻遇突智劔鐔垂血激越為神号曰

本考五十七

又曰

瓊速日神次熯速日神其瓊速日神是武甕槌神
之祖也亦曰瓊速日命次熯速日命次武甕槌神
高皇產靈尊使經津主神於葦原中國時有天后
窟所住神稜威雄走神之子瓊速日神之子熯速
日神熯速日神之子武甕槌神此神進日豈唯經
津主神獨為丈夫而吾非丈夫者哉其辞氣慷慨
故以即配經津主神令平葦原中國二神降到出
雲國于時大己貴神及其子事代主神共避隱於
是二神誅諸不順鬼神等而後皇孫降日向襲之

高十穗峯

武甕槌者常陸國鹿島明神是春日第一神殿也
武甕槌者天之進神也其先出自稜威雄走者昔
有天閻霧方四里許其中有小孔化為石窟窟中

神書抄云
天書云

有神是謂雄走走生變速日。變生燠速日燠生武
甕推

史當社之神代より平桓の將軍やして多くの邪神を滅し、あはれ神武
天皇東征の時、時も麻呂香取の村を陣頭不出見ありて、白奴が涉り
征へ給ひ、活國平天下の鎮守やして、まゝ小宮飛をしく建て、動勢不
毛三皇子、一教白く給ひ、第一第二の神を麻呂香取より、其後平將門
礼法の時、神祠も荒廢ふ中、ひい六孫王さう、依孫を秀郷、建位し
又其後、も右之將頼朝、天下の後建、四年五月、今のや、壯潔なる文殿
成、氣當ありて、社、死若干、成寄附し、給ひ、例系を、取、每八十、給ひ、成、解、おく
行、其、中、に、大、なる、もの、相、こ、小、奉、り、成、

鹿島大系
正月元日より三日まで月次の神事五節句なる日ト
日 四月 年山系

本巻五十八

日 五日 神戸會
日 七日 神戸岡白馬の神事
日 十日 神樂初
日 十四 常陸布神事

これ、の、系、の、日、け、は、じ、なる、女、の、何、を、ある、付、る、女、の、名、も、成、布、の、系、
た、書、あ、は、れ、先、之、神、本、中、並、也、自、中、に、を、な、れ、男、の、の、さ、た、る、を、そ、の、
常、ら、い、系、な、れ、を、さ、あ、り、に、さ、り、て、移、さ、さ、え、さ、あ、れ、女、に、て、た、も、
を、思、ふ、男、の、名、あ、る、常、布、を、な、る、を、神、本、も、て、神、本、も、て、を、な、る、を、思、ふ、男、を、
の、大、なる、一、く、移、さ、た、は、ら、い、の、中、に、ある、常、布、を、

日 十音 月次神事 日九日 日九日 日九日 日九日
東海はたのて、移、さ、る、常、布、を、な、る、を、思、ふ、男、を、
日 十音 月次神事 日九日 日九日 日九日 日九日



二月月次神幸七座 所神代持

三月月次神幸七座

同日 廿日 一万代神幸

四月朔日より十五日まで 幸社并末社神幸

五月恭月の晦日より 満月五日まで 神幸流落馬あり

同日 月次神幸五座

六月 月次神幸七座

同日 晦日 名越後

七月三日 平圓の神幸 路清門出神幸とて 相持

同日 七日 七授神幸 土用干神 寶珠賜凡

同日 十日 十一日 十二日 平圓神幸

八月 新嘗會神幸

同日 月次神幸七座

九月九日 重陽三神幸 相摸合あり

同日 月次神幸七座

十月 亥日の神幸

十一月朔日より十五日まで 幸宮并末社神幸

同日 御火燒月次神幸七座

十二月 初午三日神幸

同日 廿七日 菘末の神幸

同日 月次神幸

下畧

浄経場 幸社の儀あり又井の馬場あり

廣圓寺 赤巻子の松は寺の宝物として今もあり

鹿嶋放城 鹿嶋山より六郎宗幹を先とこれを築きしなり

御平盛衰記及び東鑑
 本末世系考にあり

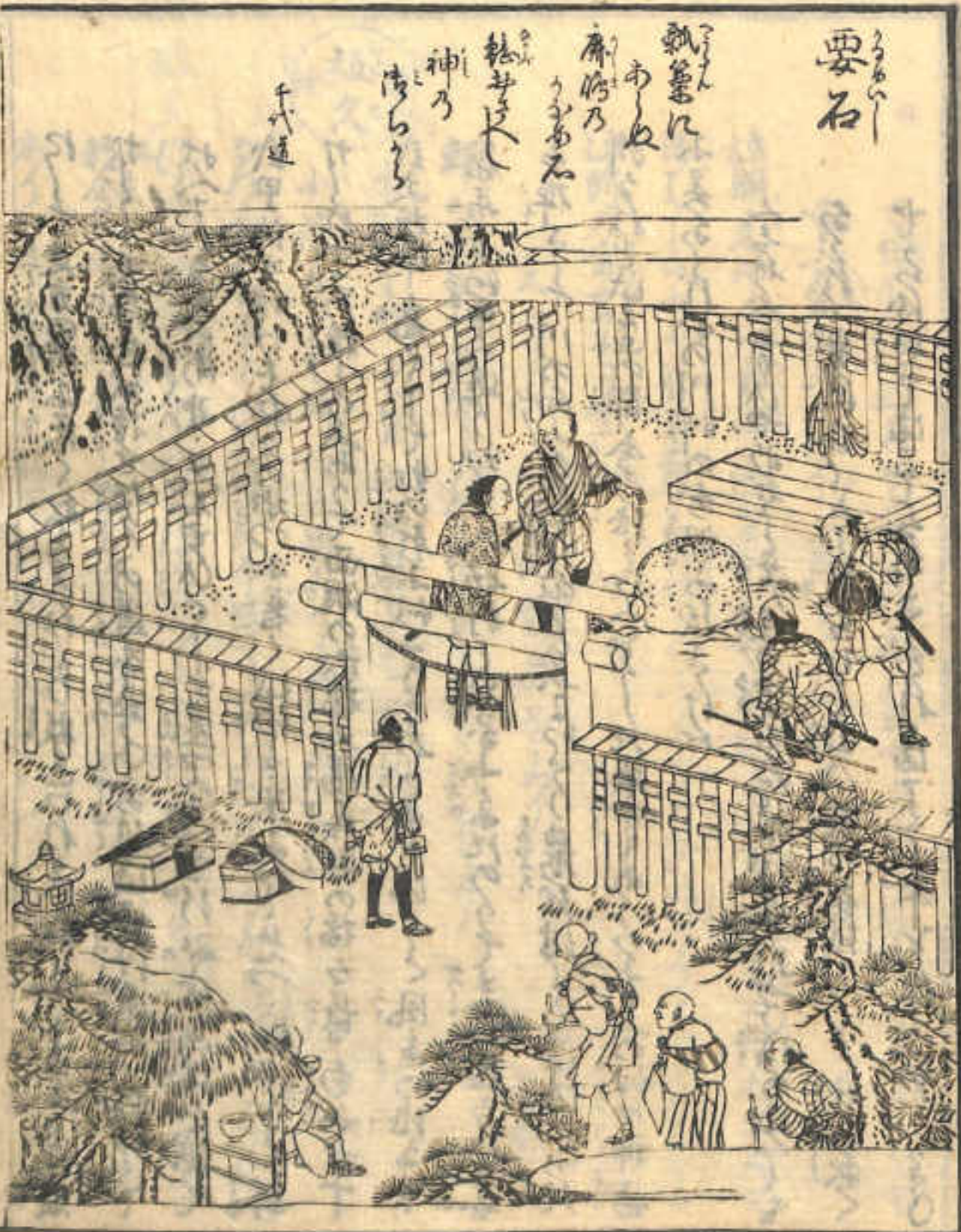
子種より又此より上應修成出く物事より人々を能工小治に日の
 と申すより浦風そよみくせ吹来まは浪志のりねをゆきゆく好く
 して千里をちぬのちありやせりや小治のねくい東あれ方小
 平申すやせりて風さうはふ吹くね成るは楫取らうね入まきく
 漕ども押しも釣人も早くえんり事あり治身小治の憂あつく成て
 いへ運風はく楫をたをよき板之の言へ用るるねすちる先
 座の海の方へくえくくくゆゆうねく風のふ事なきはのくま
 より半里も来はるん小治へ方々もあつた事さうせし小治久へ世
 中より水まちは腹をこく子治へねまはるふあわく何のさうあらん
 海へもねい又こ種事その扱くしてはぶぬなるまうはいつ方せせま
 白の地は分へくせは能工潮歌の色成車く白の地へ漕り小治方
 て一所ありこ種小治をなぐくして又楫取まきく押り小治をり

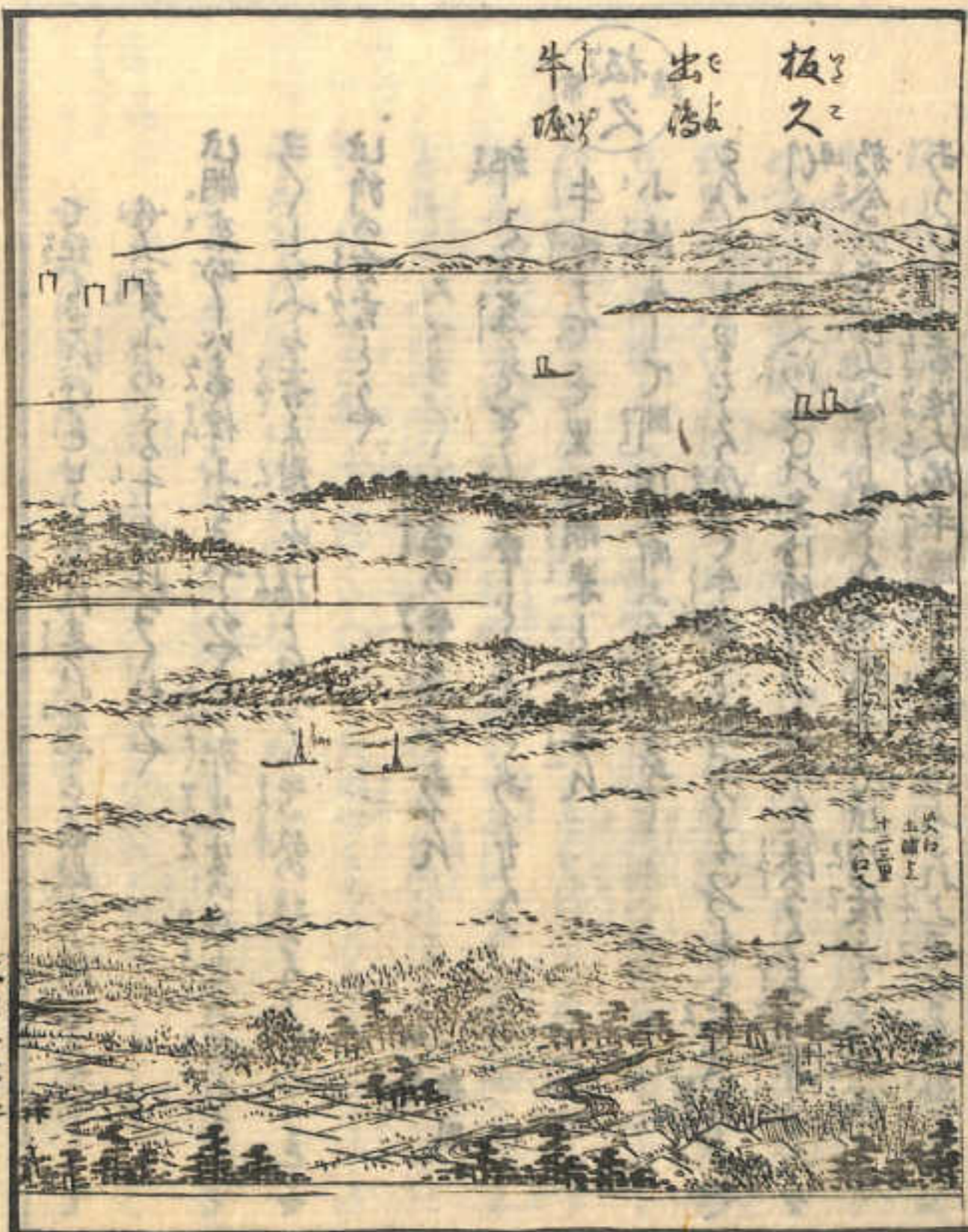
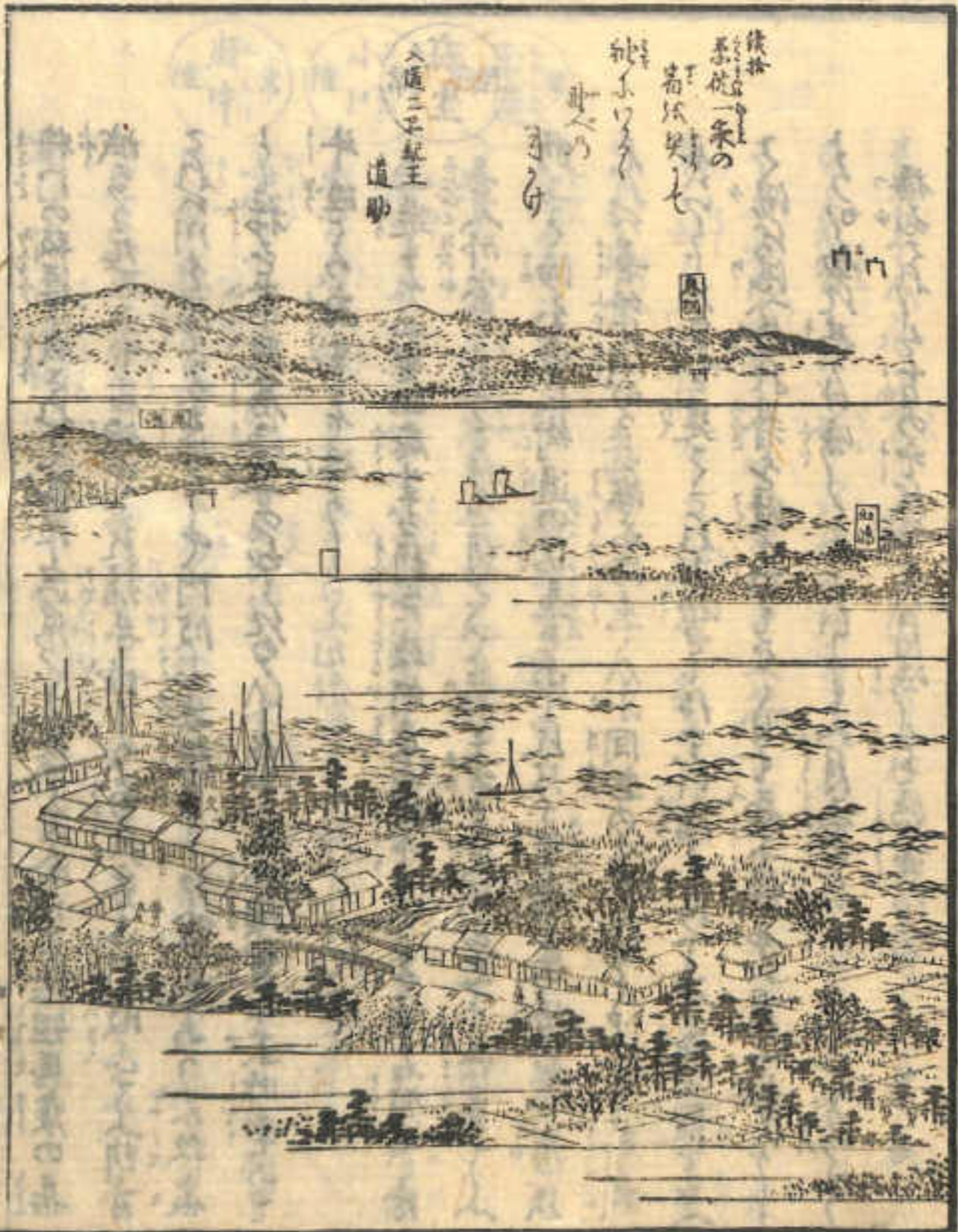
本末世系考一

要石

執事
 市
 麻乃
 松井
 神乃
 清乃

千代通





本方此三

將門の取運下城と云く其後と云く其後と云く今ハ土屋但馬度の居
城より九万五千石領あり其城牛腰より南に方小阿波とて一所有
これ六川を隔てる土地ありて阿波山安徳と云く其城より大坂
とも移る常陸房海尊の由り此の所へ又北頃賀も其時其の
牛腰と云く麻生と云く其城より

麻生

玉造まで四里は麻生と新庄阿波の城下なり其石七千石
あり外家もあつて其城より
所少く泊るもの街道の所もあつて凡そ里離れの酒家も店も
えれば番茶織ありと深本海素と云く小同物の多き所なり其
其の所は家と建つてこれ小坂と云く其城より
く湯谷港へ是れ暑を避つて住む人もあり其城より六月と云く
より其城より其城より其城より其城より其城より其城より
梅雨と云く其城より其城より其城より其城より其城より其城より

是をそと人ぞく小書と云く其城より其城より其城より其城より
きく免容しける者も其城より其城より其城より其城より其城より
さうて知れよ方と云く其城より其城より其城より其城より其城より
寒く動し其城より其城より其城より其城より其城より其城より
そくく用と云く其城より其城より其城より其城より其城より其城より

玉造

小川

府中

小川まで二里は其城より其城より其城より其城より其城より
道より桑店即房も是れ其城より其城より其城より其城より其城より
府中まで二里は此と水戸街道より其城より其城より其城より其城より
もあり水戸城下と云く七里と云く其城より其城より其城より其城より
小畑まで二里は其城より其城より其城より其城より其城より其城より
所其城より其城より其城より其城より其城より其城より其城より
小見まで六里は其城より其城より其城より其城より其城より其城より
積りよ其城より其城より其城より其城より其城より其城より其城より



小畑
 陸
 十三
 瓦屋
 小畑の町より入場ふそのく口は案内をめぐりて
 先ふまきりひのくく墨山と知りた石舞をを越くまひる春く日
 土山の端ふられくく打ねを御提灯とたうふりよそねちる可
 ゆきく兼村城より川ちうのくく兼村のくく案内のくく通次をくく賑々
 入念それよりひふるをばくく降り道とくくし山家とねりき前
 月動る是は小畑の里より流波山の舞まりのの道はまの今まをくく
 なる宿をるく小五六町もゆく斤山里の酒家なりあり物く今夜
 木客ありとて止反そ終り又泳へくくしてゆきことゆき
 舟の二の夜よりく宿城をよめくもけし農業忙くことと止反
 又海をくくしてゆきあきある葛原の月くゆくぬ
 十三塚までき里小畑の宿城まきり小茶の茶より降けくく取まげく
 杖もまけり芝草もまき成道と石高く風吹く夏茶堂城渡り
 雨降くくして淋く側本法雲寺て上梵文ありけ門本流波山ま

系神 伊弉諾尊

女縣神社 伊弉諾尊

系神 伊弉册尊

日讀尊社 月讀尊社 素盞鳥尊 怪兒尊

二神約幸原

千手窟

鸕鷀石

安座石

白雲庵

羨那濃川

遺蹟

新遺蹟

後拾

伊弉諾尊の御宇に於ては、此の川を以て瀬と爲りて、
小泊の石乃さうやまの長河を以て瀬と爲りて、
此の川を以て瀬と爲りて、

陽成院

系神

侍從

本巻五七

新遺蹟

英那農川 孝よりなる紅きくを以て波と爲りて、
櫻川 小川の川の下流なり

正三

後撰

常とを素盞尊に奉りて、櫻川に流すを以て瀬と爲りて、
大御堂 鏡波の山下にあり

世之

奉る千手觀世音 觀世音の尊より出現の

三重塔

岡山塔

薬作堂

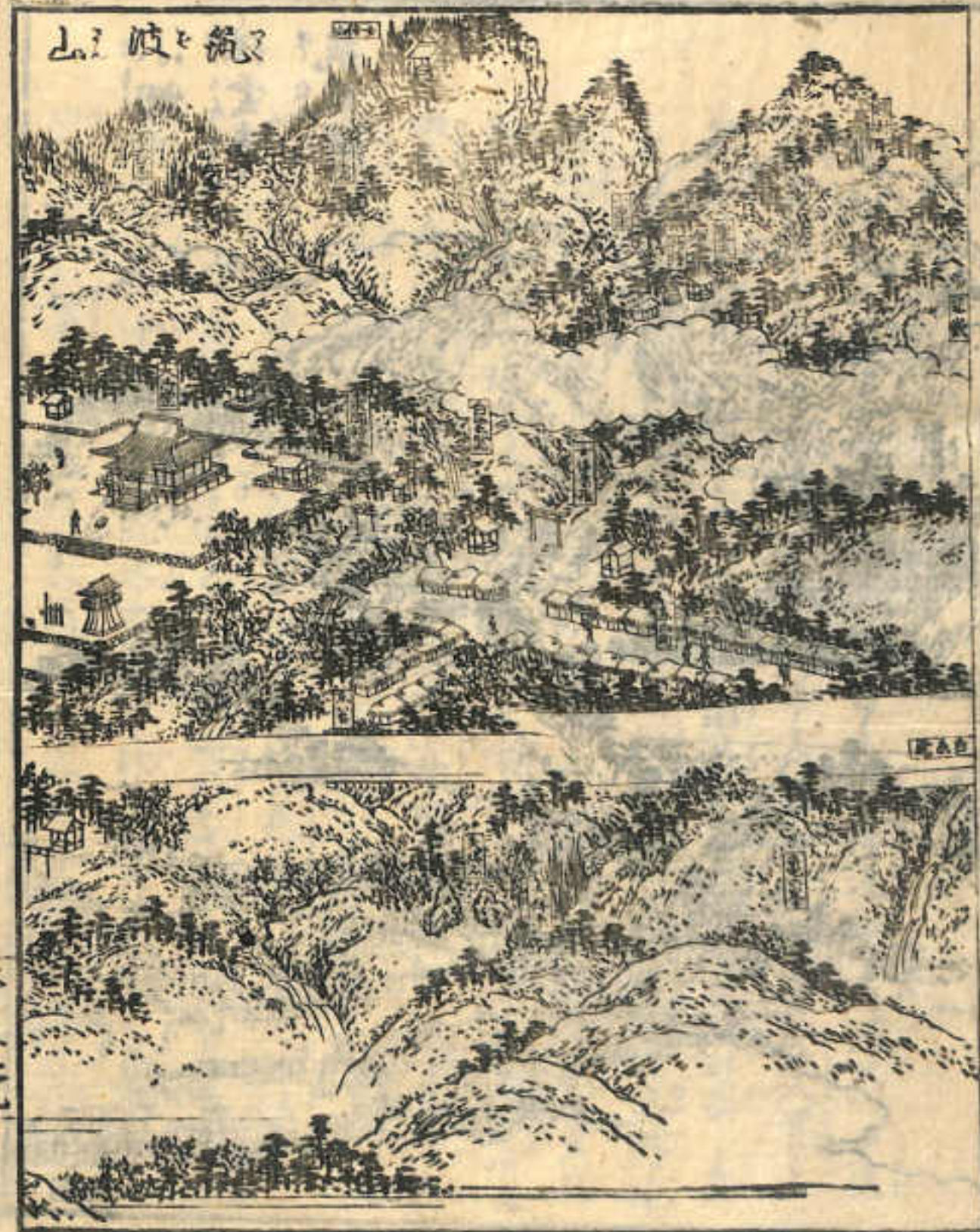
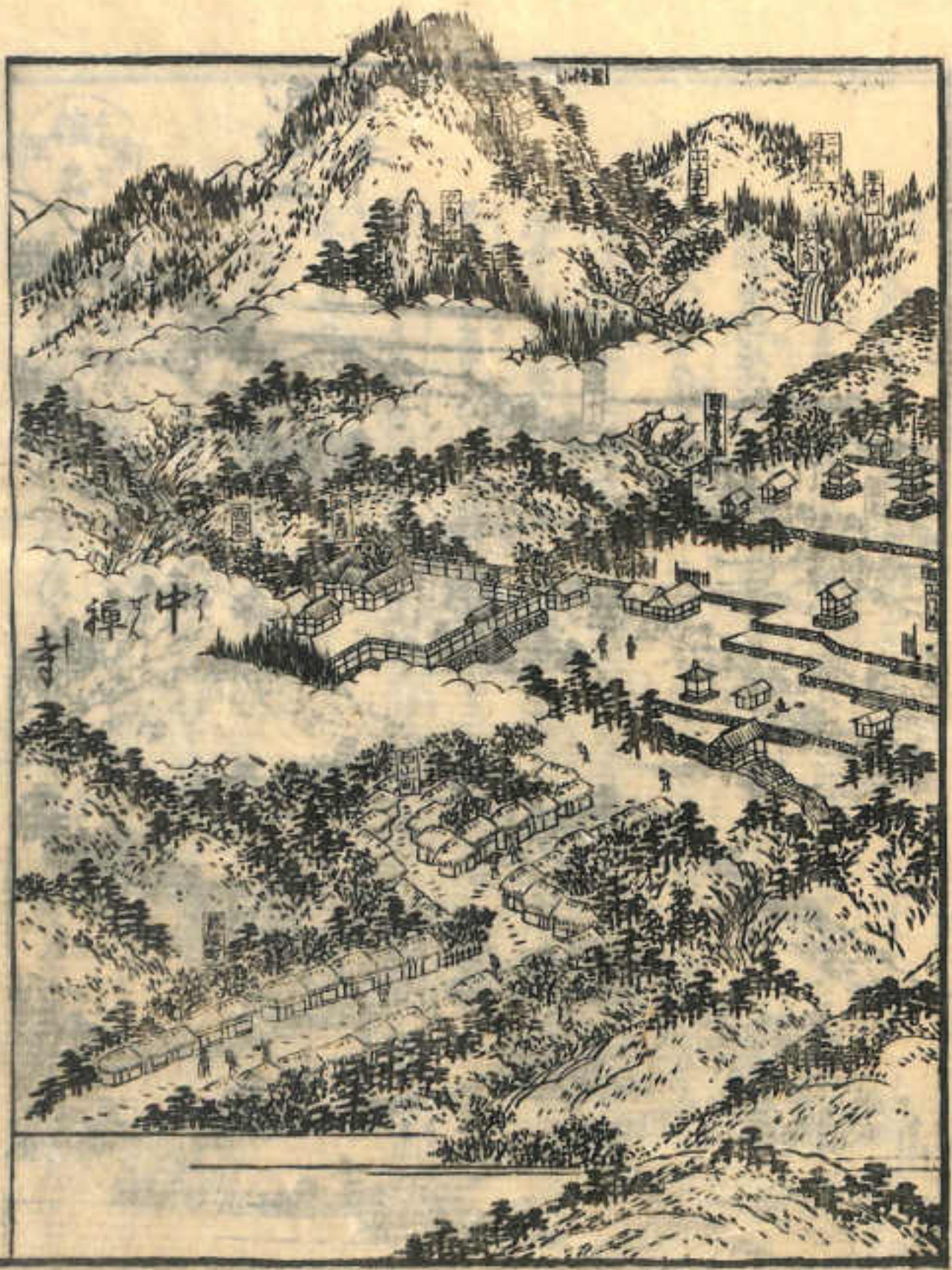
志子堂

求聞持堂

聖天宮

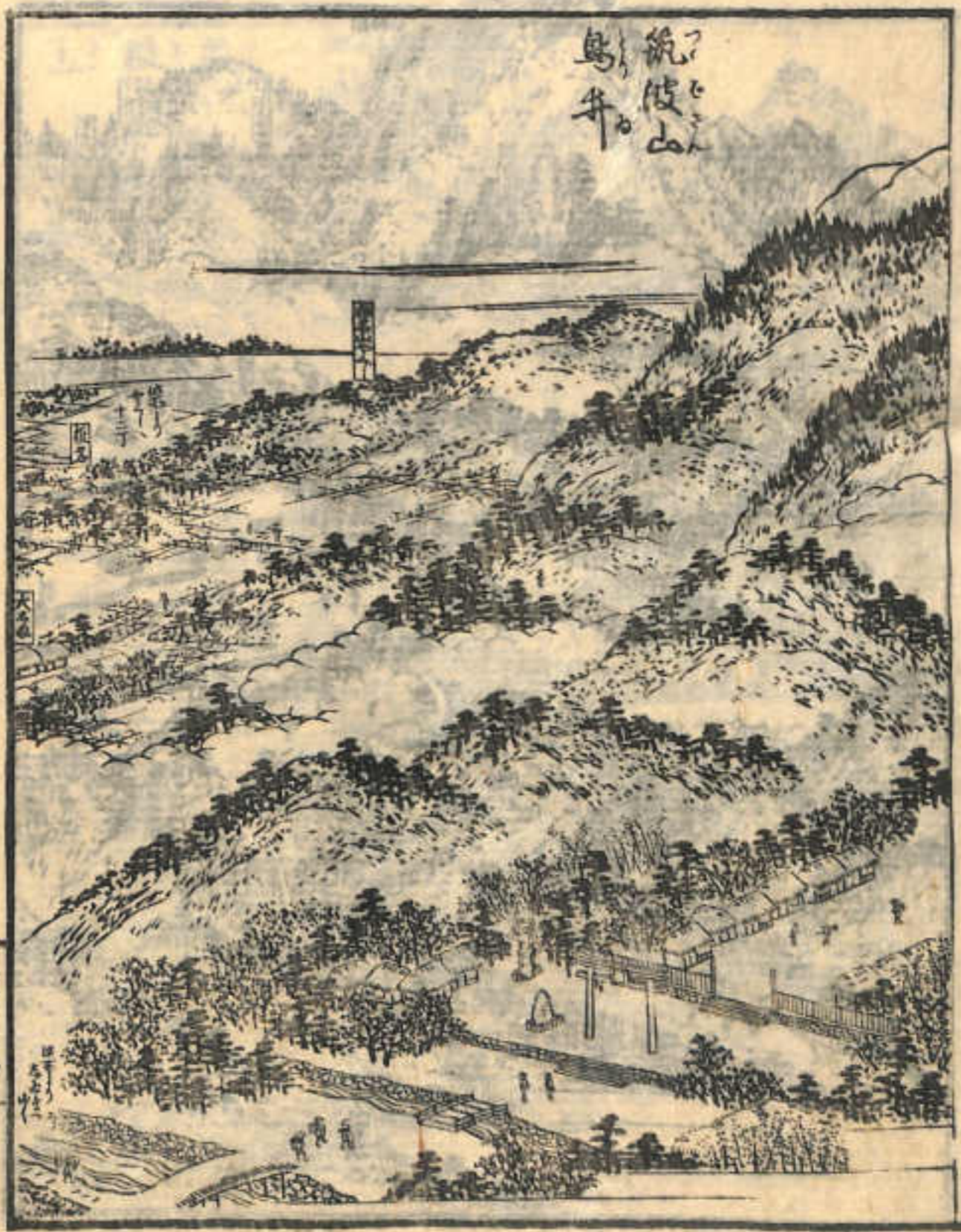
為徳堂

男辨鳥居



本考九十九

統波山
鳥井



本巻五十三

号はこれ南の神乃雷泉とれがまき急下りてと名府陸湯
 和合乃源まあり及ふ山女之境界小あり辰坂赤五妻の妻山なり時云
 東開官家の所帰依あり六月日輪勢宮一清人道城遠ふあり公東乃の
 霊嶽とてお徳の道乃所神と仰ぐを思れありと志れは神は統波
 山を漢とあり五基山の西南勢開けとあり北東とて万ふなり
 山中小吳茶好本まあり及分中徑とあり江府乃高防を護持院と
 号しま云宗にり寺あり千七百名統波乃町長くして奇異なりと
 唐まきふも家もまあり先を西國乃名嶽ありてみふは所神と
 恵とありとあり

一鳥居所あり

雲を中よりさげまけしは乃統波山

嵐雪

推名

小兼中を四里半とれありりて林野を日くさぬるも所と
 道より見ると志たふと海とく長と中とありとて民居有

氏居るく又所茶ありゆれも日トと高まりて同登ま久河と云
なけ川と常陸下所乃國界あり程あり小栗北里小泊る

小栗野

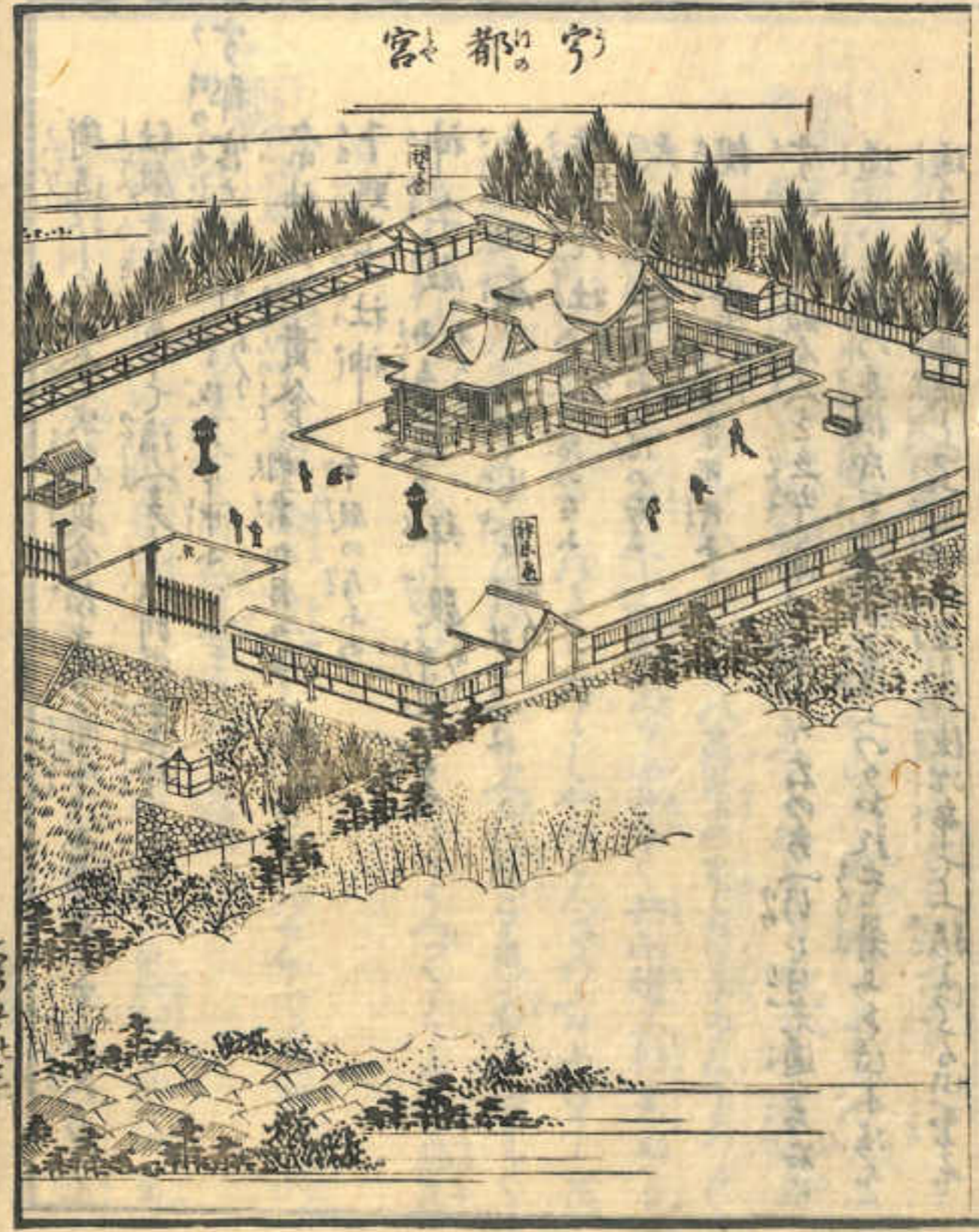
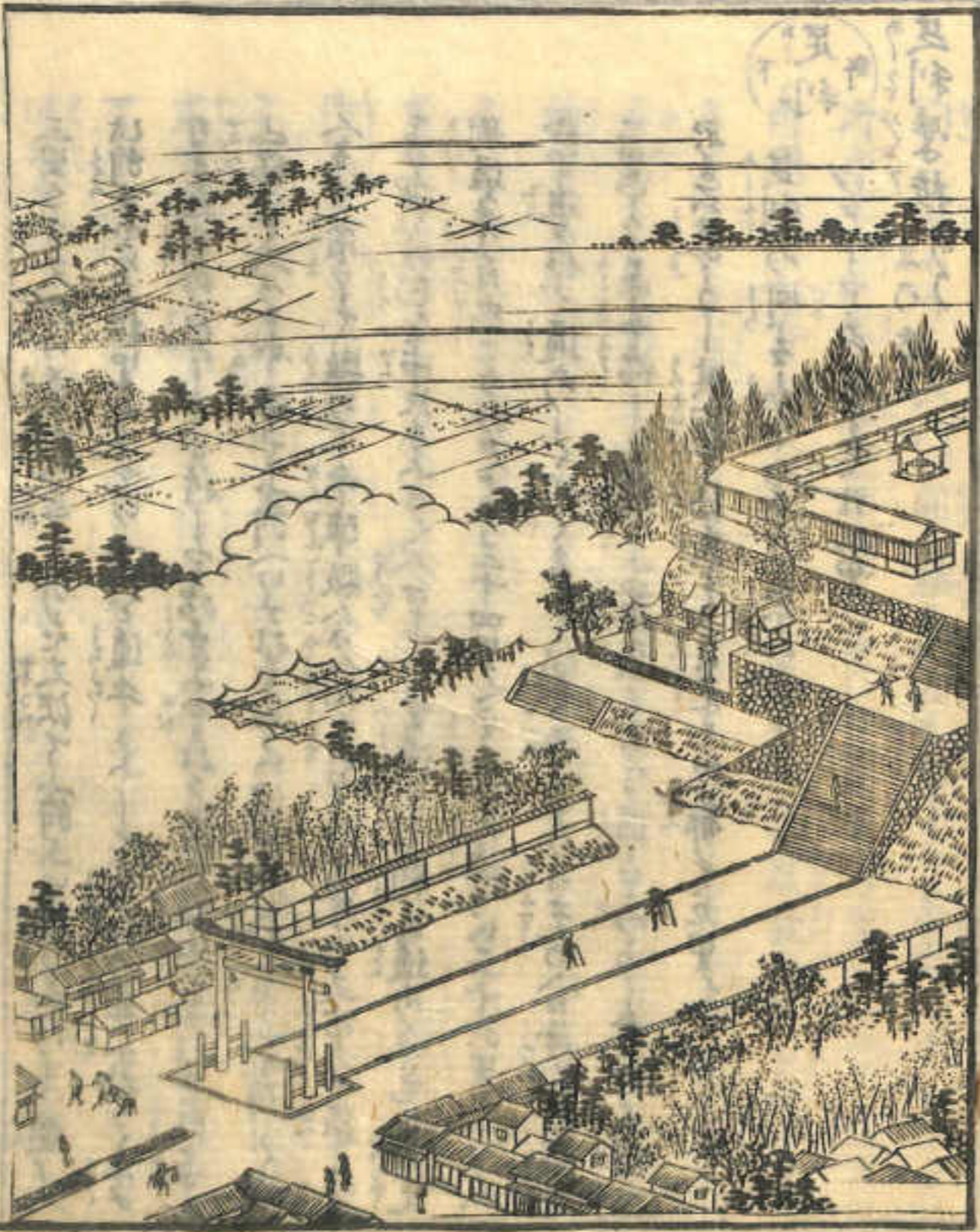
其國を二里八町小栗より馬とりて野鹿まで日わすけきば
酒をたふさく馬結の小鉄婦一匹はくつてふ乃程れげふまきて
町道のいそごり物する本嵐とてあぐりてたてりて藤一庵とて高
さ袂にそくおぼひひく一叔齋と音陽のをたへりてと三春乃やひ
をそ所許由が頼門の月小住一おぼく一靴の器をうけりてとひ
物とせく程とありまはふと云

真岡野

小守屋中を武里八町は真岡とて前を名くし中細と本陣を
さし向うくまふ素門をこの服本用白を分真志本抄と云
は所と近隣の村並乃給會此地をねがふひの庭まき一又販食人拍戸
も見ゆり白虎通ふ其貨物遠近ふあひ四方本通とて今を飛む
て秋瓜ふん者人との元龜と陶水何りし時天下の中四方小守

本若五世

通して交易を所産成落く千金成紋に自秘く陶朱公と号
後小あり所と並相ふとて庶人ありとた千金の主とめると自負と
わらひくは地を懸は信とれり又井原のり先見くは度とこと馬
借りて紫月とてゆりく本茅とてとた草蒲の花咲とてねと夏花
葉通ふまき一武里もゆりも人衆もとて馬結りよけ此の陸奥
まてもゆりておと四十好甲ととりとて小株や下野の名とまき小
よふねとんと思ひり分人里も見くはては懐中不烟ふと公と体先
付茶のふもふたれを樹林もねく竹柱とて平原芳とてねと運を
かき風外の遊練活とての嘉祥ありけ分りててお逢ふとてみ先
かり突と馬ふあうい後逢ふとてりねとて所小茶志とてはとてね
人をとたふやふとては乃あられを以種のおとひとせりひとて種と種酒
のてふとてあははは厳とてくして利根川小島をふとては川を
越く中守をてふ所よとておは道回時とてふ所とてあてて草籠



本町五州三

寺に學校と建く和漢の群書を蔵し佛書も甚多
と押金沢文庫乃西文字紙巻本書以又菅原源成氏に至る人小舎
も頗る多し書籍多しからん小舎文庫もその類なりそれより里
あつて近世は學校の二要和者より後なり是利の書を持し洛東
一宗寺小僧と二要の頗方才辨ありて 將軍家にも伺候に世乃人
これ外學校と号はは附 官家より植字一萬字と所寄附あり是
利の學校も維持する僧の鎌倉建長寺此僧後たり今も學校と稱ど
業位僧侶供立六人ありその内にも儒書或勅學はは所廟本社領石
宮祭より所寄附は聖堂と寛文年中に於たり所建ありまこと
聖廟乃東の方に引とあれと寄居あり申北正面小書所を安ん又其
西小 國初將軍北侍後牌あり
學校の東隣小虚空庵寺あり又寺と堂あり西の方小島山あり香氏
乃城跡ありやうは是利の所を廻れば大河あり波ら頗るよく是利の

上野 太田

町とつたあつて下野上野の國界なりとせは川上是利より二里半奥小
相生とつた所あり為と緒と多く織物たり相生と緒の名よりして
るび諸國へは地より出る
是利より上列梁田へ半里八本へも里を回して一里半を回して
本等へも里二十町
を回ると新田義貞乃古城たりは所新田たりは少い城山有
ありて金ヶ谷と新田大炊合義をより義貞を最任志なり一あり
上野國乃何人新田小を節義貞より八幡を節義家十七代の後
胤源家嫡流の名家と御ととも平氏世とよりて四海のみ威小伏とる
折ありを力あり國末の侍役もは多く金別所のありては向と
なるはふいなる本等と物本に人あり所統半を回入及義家所近所
て宮いなるはあり一より海平と原朝家には多く平氏世とより
と外と海成をるを所是海家上城あり日平家と種を治じまへ

を平部と

不有ありんか下りも高きれども人知りて後代も其の名はけせり案
御ふ今相持入たるのり流を思ふも威を遠くふあはれは幸國り
居りて我をあげ先勅の居居候中もあまき人へはむらりか勅令は
高きもをけりしゆふいとして大塔の今有候賜りては幸國を達
まごさや向ひのれを御田入道思く大塔宮をいさのゆ中にもひ
て所をいさるれを我思方候を思ふとし之を思く令旨をいしりし
や幸をまげふ候幸りて其のまご役助へて候をいさ其ま日取回
其のれを思ふ候二十人野伏のすくふ物とせく其申ふくま
の事へ言せ我身と慮り勢のまご候て物もいさ其まをいさ進つ
久しゆは御り同士軍候てまごりまごりまごり勢の都乃野伏
ふもまねを言き候方は野伏とて知力と令旨人あふ候候の事
よりまご人各をいさ進つたるまご御田が勢の中にもまご十一人
まご生捕てまご取回は生捕ども候御ゆりてをまごふしけるを

本考也世也

今海も候たつりゆあはれする幸令も候せんあふあはれ御田候幸は
へりて御旗を上んて御ふま令旨あてけりまごりまごりま
之候まの御生御候事ひ向んあま御捕は之令候候候候候候候
しては方の便をはまご官の御所あるまごまごまごまごまご
まごまごまご其御もあまごまごりまごりまごりまごりまごり
まごりゆりまごりまごりまごりまごりまごりまごりまごり
十人をまごまご人官の御方へて我まごりまごり今や中相候まご
一日あつて令旨候持もあまごりまごりまごりまごりまごり
あつて御旨の文章に書れり其詞ふりて
論言候あつて日記を後鳥國を理も所を明君乃徳ありれと
く四海を治むる武臣の節也頃幸の同高時法隆之教 朝憲候
形ひが治りて憲まごりに遠威を振り候魚のまごり天珠候あつる
まごり果幸の衣候候まごり人あま御小將一筆の義を起んとん

あつて御旨の文章に書れり其詞ふりて
論言候あつて日記を後鳥國を理も所を明君乃徳ありれと
く四海を治むる武臣の節也頃幸の同高時法隆之教 朝憲候
形ひが治りて憲まごりに遠威を振り候魚のまごり天珠候あつる
まごり果幸の衣候候まごり人あま御小將一筆の義を起んとん

本崎野

芝まで三里半十町本崎の南半里徳川より所あり松平の所也
祖 徳川四郎義孝此れ徳川一所之其後代々此地に住す一の大徳川
村馬二百石あり其所の畧家は有り取らざる義貞の後裔新田年人
り之 官家より知り三百石下され徳川の辺村回高村不居住せし
或曰義貞の子孫若松乃江布在知り六百石とされ若松村不居住せ
り新田乃志之 上奥原氏の芝の岡小竹石の傍あり新田七波子
利根川の別荘にむね川より流るる利根川とせしむるあり
五料まぐき里 芝と五料の岡本利根川あり五料の芳川の傍に上
官家より所番あり中元より成りむ芝と五料の岡本所あり
てあり川首魚本一里を定むるは是より麻橋に里利根川の上と赤木
山と麻橋の上あり之は伊香保乃沼も赤木山乃志あり之所あり
倉加聖まで三里は岡本玉村より所ありは倉加聖より東と
道乃幸街道あり

芝野

五料野

下野五料八

下野五料八

惣社大明神

下野五料八は日光初石町より今市まで五里
今市より板橋まで五里 板橋より麻橋まで三里六町
は岡本文夾より一石ありあれを秋打り
麻橋より赤木系一モリ系 赤木系より倉加聖まで五里
倉加聖より左の方一モリ系は惣社村あり其邑は林あり
其内小倉一坊あり
惣社大明神 惣社村あり
は麻橋の南本室乃角一坊あり小倉乃一坊あり八ッ坊ありその
先づの坊よりして地と平均あり今とあり坊乃大サツ井まで方
武岡より有其係ふ板おく生あり坊のまらる池より水まら
種乃一とくまらる坂黄鼠一けし其村の人あり一と一今水
を死し種も形くまらるワケあり所あり
いそらひありとまらる死室の八あり種一と一

下野

下野

